

第三章 玉鬘の物語 夏の雨と養父の恋慕の物語

[第一段 源氏、玉鬘と和歌を贈答]

*御前近き呉竹の(対屋の前庭の縁側近くに植えた呉竹の)、いと若やかに生ひたちて(とても若々しく生い育って)、うちなびくさまのなつかしきに(風になびく様に心引かれて)、立ちとまりたまうて(殿は縁側に立ち止まりなさって)、 *注に<夏の町の御殿の西の対。『完訳』は「源氏は若やかな呉竹に、五条の夕顔の家の呉竹を想起。夕顔と玉鬘のイメージが重なる。源氏の詠歌のゆえん」と注す。>とある。

「ませのうちに根深く植ゑし竹の子の、おのが世々にや生ひわかるべき (和歌 24-10)

「手塩に掛けて育てても、娘はませて家を去る (意識 24-10)

*注に<源氏から玉鬘への贈歌。「ませ」は六条院、「竹の子」は玉鬘を喩える。「世(男女の仲)」と「(竹の節(よ))」の掛詞。「節」は「竹」の縁語。大切に育てた娘もやがて成長した後には結婚して他人の妻になってしまうことへの哀惜の気持ちを詠む。>とある。「ませ」は<竹や木で作った丈の低い垣根。「まがき」に同じ。>と古語辞典にある。「ませ」が垣根だから、「ませのうちに」が敷地内で六条院のことになる、らしい。そして、竹垣だから「根深く植ゑし竹の子」に洒落言葉として掛かっても居る、のだろう。さらに、「増す(増える、大きくなる)」は四段活用でその已然形は「増せ」だから、現在完了の<既に大きく成っている>という意味が「ませ」に重なる。竹の成長は驚くほど早い。それやこれやで、この「ませのうちに」がいわゆる「マセた子」の<知らない間に大きくなって>を思わせるから、多分この歌は面白いのだろう。また、「おのがよよ」に<別々の人生>と<竹の一節一節>を掛ける技巧は嫌味なほど出来すぎている。きっと前例があるのだろう。

思へば恨めしかべいことぞかし(思えば恨めしくもある此の世の廻り合わせだわな)

と、御簾を引き上げて(姫にも庭の呉竹を見るように)聞こえたまへば(申しなさると)、みざり出でて(姫は膝を進めて縁側近くに出てきて)、

「今さらにいかならむ世か若竹の、生ひ始めけむ根をば尋ねむ (和歌 24-11)

「今さら親を尋ねても、幼い日には帰れない (意識 24-11)

*注に<玉鬘の返歌。「根深し」「竹の子」「世」の語句を受けて、「世」「若竹」「根」と詠み込む。「若竹」は自分を、「根」は実の父親を譬喩し、今さら実の親を探して出ていったりしません、と応える。『集成』は「源氏の歌に「おのが世々にや--」とあったのを、実父の方に行く意に受け取ったもの」と注す。>とある。「若竹」は<その年に生えた竹。>と古語辞典にある。ヒトで言えば、赤ん坊かせいぜい幼年期を指すのだろう。親に会っても生まれ変わるわけじゃないから私の人生は変わらない、くらいの歌筋のようだが、頭に「今さら」と諦観を表明して、そのまま意外な展開も無く詠み終えてしまっただけは、気持ちではなく理屈かと手抜きを疑う。が、その姫の手抜きを表現するための、殿の贈歌の技巧だったらしいことが下文で明かされる。

*なかなかこそはべらめ(かえって不都合なようですから)」 *この言い方の理屈は、殿が姫に諭した「かの大臣に知られたてまつりたまはむことも、まだ若々しう何となきほどに、ここら年経たまへる御仲にさし出でたまはむことは、いかがと思ひめぐらしはべる」を丸々呑んでいて、自分の気持ちの整理は付いていないものの、この場を遣り過ごすには何か答えなければならず、それなら殿の意向に沿って応えておけば良いということで詠んだのだから、言ってみれば姫は殿のご機嫌を取った、ワケだ。

と聞こえたまふを(と答え申しなさるのを)、*いとあはれと思しけり(とても殊勝だと思いでした)。 *「いとあはれ」は、姫のご機嫌取りの返歌を聞いて、姫の物分りの良さを感心する殿、といった描写らしく、「けり」と突き放した語用に、少なからず源氏を揶揄した滑稽譚の語り口が見える。

*さるは(しかし実は)、心のうちにはさも思はずかし(姫は内心ではそんな風に思っていないようです)。 *この文は、注に<『集成』は「草子地」。『完訳』は「語り手の断定的な評言が、かえって玉鬘の心の複雑さに注目させる。後続の心情叙述とも連動」と注す。>とある。「さるは」は<その実は>と内情説明に移る接続詞。「かし」は<直接話法での念押し>のように説明され、現代語の「さぞかし」が<相当に大きく>といった意味合いでもあることから、此处の「さも思はずかし」も<いくらなんでも、そんな風には思わないのです>というような語感に受け取って「語り手の断定的な評言」と言うのだろうか。いや、だから、「語り手の評言」なのだから<直接話法>では、そも無いではないか。それに「さぞかし」にしても、「さぞ」は<左然、そのような形状>で、「か」は<くらい、程度>の推量、「し」は過去形の言い方で概念上で想定した対象単位を示すから、座中の人々が共有できる想念体の大きさの、詰まりは‘推量’だ。直接話法での<念押し>というの、話し相手の概念と自分の概念とを一致させようと推し量って見比べる作業だ。だから「かし」を<か(も)し(れない)>と見るのも丸つきしの当て図つ法では無さそう。それに「い」「ろ」「は」四十八文字、もしくはそれ以上の一音一音に、本来は人類共通ないし近似の意味があったらうと、私は漠然と思うのだが、この駄洒落風解釈はその語感にも通じる気さえする。それでも、「さるは」と説明口調が始まって<かもしれない>の推量で終わったのでは説得力に欠けるので、<ようす>と分析報告の体は取ることにする。とは、随分と能書きが過ぎた。いや、だから、この文は「語り手の断定」ではなく、いよいよ以って滑稽譚の語り口、なのだろう。

いかならむ折聞こえ出でむとすらむと(どのような機会に内大臣に打ち明けられるのだろうか)、心もとなくあはれなれど(姫は皆目見当が付かず途方に暮れたが)、この大臣の御心ばへのいとありがたきを(この源氏大臣の御親切がとても尊いので)、

「親と聞こゆとも(実の親と言っても)、もとより見馴れたまはぬは(昔から御見知り置かれ為さらないのでは)、えかうしもこまやかならずや(とてもこの殿ほどは行き届いたお世話では無いのかも知れない)」

と、*昔物語を見たまふにも(昔話をお読みになっても)、やうやう人のありさま(次第に人の生き方や)、世の中のあるやうを見知りたまへば(世の中の仕組みをお分かりになれば)、いとつつましう(このようにお世話下さる殿のご厚意にととても気が引けて)、心と(実の親に会いたいのが本心だと)知られたてまつらむことはかたかるべう(殿にお知り頂くことは難しそうだ)、思す(お思いです)。 *「むかしものがたり」については注が無い。が、不用意に内大臣家に入っても必ずしも歓迎されないかも知れないと言う此処までの文意からして、継子いじめの話だろうと推察する。で、今に伝わる当時の継

子いじめの話といえば「落窪物語」が有名らしい。私は未読なので具体的な感想は無いが、それらしい物語の例示があれば実際に本を読んでいた姫の姿も想像しやすい、気はする。

[第二段 源氏、紫の上に玉鬘を語る]

殿は(殿はその後の姫の態度を)、いとどらうたしと思ひきこえたまふ(ますます愛らしいと思ひ申しなさいます)。上にも語り申したまふ(そしてそのことを、奥方にもお話なさいます)。

「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな(何となく故人に似た姫の雰囲気だ)。かのいにしへのは(故人は)、あまり*はるけどころなくぞありし(あまりに晴れやかなところが無かった)。この君は、もののありさまも見知りぬべく(ものの道理も理解できて)、気近き心ざま添ひて(人懐こさも備わっていて)、うしろめたからずこそ見ゆれ(貴人の妻たるに十分な人柄かと思われます)」 *「晴るけ所」は<気分を晴らす場面>。夕顔は逃亡者だったから、それが無かった、のだろう。

など、ほめたまふ(お褒めなさいます)。ただにしも思すまじき御心ざまを見知りたまへれば(その様子から奥方は殿が、このままにしては置きなさないような女好きであることをご存知なので)、思し寄りて(殿が姫に言い寄ることに思い当たりなさって)、

「*ものの心得*つべくはものしたまふめるを(姫はものの分別がつきそうでいらっしゃるのに)、うらなくしもうちとけ(殿を疑いも無く親しんで)、頼みきこえたまふらむこそ(信頼していらっしゃるのには)、心苦しけれ(胸が痛みます)」 *「もののこころえ」は<男への用心=殿の下心>。男が女を抱くことが悪いわけは無く、父が男に豹変する怖さ。 *「つべし」は<完了の助動詞「つ」に推量の助動詞「べし」のついたもの>と古語辞典に解説があり<～出来そう>と説明される。上が姫をこのように評するには、少なからず判断材料を持っていたことを意味する。第二章第一段に「西の対の御方は、かの踏歌の折の御対面の後は、こなたにも聞こえ交はしたまふ」とあり、どうも同段の既述は意味深長に見える。

とのたまへば(と仰ると)、

「など(どうして)、頼もしげなくやはあるべき(私が頼もしくないことがあろうか)」

と聞こえたまへば(と殿が申しなされば)、

「いでや(いいえ)、われにても(私にも)、*また忍びがたう(同じように堪えがたい)、もの思はしき折々ありし御心ざまの(悩ましいことが度々在った殿の御豹変が)、思ひ出でらるるふしぶしなくやは(思い出される事柄が無いとも…)」 *「また」は<同様に>だが、上が言うこの言葉は<娘を犯す父>を意味するので重要だ。

と、ほほ笑みて聞こえたまへば(奥方は微笑んでお応えなされるので)、「あな(何と)、心疾(こころと、察しの早い)」とおぼいて(と殿はお気付きになって)、

「うたても思し寄るかな(厭なことを考えなざるものだ)。いと*見知らずしもあらし(姫は幼子では無いのだから昔の貴方のように男女の仲を、良く分かっていない筈はありません、だからそういう御懸念には当たりません)」 *「見知らず」は、注に<主語は玉鬘。『集成』は「(万一、私に好色心でもあれば)玉鬘は、とても見抜かずにおかないでしょう」と訳す。>とある。「主語が姫」には従うが、「見知らず」の内容は上の「うたても思し寄る」ことに違いない。今から14年ほど前、光君22歳、紫君14歳の十月に、それまでほぼ四年間養女のように面倒を見てきた光君が、ついに紫君を犯したのだった。紫君にしてみれば、父とも兄とも慕っていた優しい人が不意に自分の中に固くて熱い肉棒を突き刺して来たのである。それは驚愕し恐怖したに違いない。が、通り魔では無い。具体描写は皆無だったが恐らくは、例によって光君は「可愛い、可愛い」と口洩らしながら、それまでとは違う優しいだけではない、男の逞しさを示したのだらう。それに、紫君は二条院に強奪された時こそ10歳と幼かったが、その時は14歳に成っていて、情交に疎いというのは少し晩生だった。などといった、その辺の事情を殿と上は「うたても思し寄る」と共通認識として考えた、のだらう。その上で、14歳でも幼女ではないが増えて対の姫は22歳だから当時の紫君とは違って世間知らずの筈がない、と殿は主張している、のかと思う。ただ、京生活で身分の後ろ盾が在った光君が気ままに戯れ合った京女が、是亦それなりに身分の後ろ盾を得ていた事に比べて、筑紫へ流れた姫には中央に繋がる身分保障が無く、中央復帰を願えば手近な男関係は地方埋没を意味したので、京女のように生身の男と恋に遊ぶことは出来なかったに違いない。が、光君は藤原姫と聞けば、つい高貴で自分に相応しい女という縄張り意識が働き、筑紫へ流れた辛い事情には理屈では分かった心算でも、既に情欲に駆られた目には相手の女を、かつて遊んだ京女たちと同類に考えたくて、つい左様に見なし勝ちだったのではないだらうか。とかいったことも、以前にノートした気もするが、斯くて言い換えの通りとなる。

とて、わづらはしければ(面倒になりそうなので)、のたまひさして(話を中止なさって)、心のうちに(内心で)、「人のかう推し量りたまふにも(妻がこう察していなざるのを)、*いかがはあべからむ(どう宥め付けたものか)」と思し乱れ(と腐心なさり)、*かつは(その一方では)、ひがひがしう(常軌を逸した)、けしからぬ我が心のほども(邪悪な自分の本心も)、思ひ知られたまうけり(あらためて思い知らされなされたのです)。 *「いかがはあべからむ」は分かり難い。が、分かり難いと言っても、「いかがあらむ」を<どう思うかな>とか<どうなることやら>くらいの意味で使うなら、時に今でも言いそうだ。だというのに、古文の「ある・らむ(どうなってるんだ)」の現在推量と「あら・む(どうなるんだ)」の未来推量が、「る」の有る無しという少しの言い方の違いで意味が大きく違うという紛らわしさは、やはり分かり難い、というか見間違えやすい。でも他には、「は」は一呼吸置く客観視で、冷静な思考を試みる姿勢。「あべから」は「あべし」の未然形だが、「あるべし」は<して置くべき>という成果概念で、「べし」の<すべき>という規範概念とは違う。という注意点だけだ。だから「いかがはあべからむ」は、訳文の<どうしたらよいものだらうか>よりは<一体どう決着をつけるべきだらうか>の方が誠実な逐語訳だ。だから実は「人のかう推し量りたまふにも」こそが、訳文の<上がこのように推量なざるもの>ではなく<上がこのように推量して不機嫌でいらっしゃることの対処にも>と読むべき、かと思う。 *「かつは」以降で、光君は改めて自分の邪心を自覚した、というような書き方になっていて、次の展開を期待させる言い方に思える。が、この段で作者が示しているのは、恐らく光君の甘い性格だ。幼き日の紫君をさらう直前に、光君は葵上を訪ねて‘ふるさと’を確認した。今は紫の上が‘ふるさと’なのだらう。‘ふるさと’とは、最後の抛り所で、母を三歳で亡くし、祖母も六歳で亡くし、絶対に信頼できる存在を失って漂流する光君の深層不安は一生拭えない、と同時にそれは誰にも理解されない、という孤立感を浮き上がらせている、のだらう。が同時に、それで無茶が許される訳でもない、という冷めた視点でもありそうだ。

心にかかるままに(そうしたいろいろな思いが、気になるので)、しばしば渡りたまひつつ見たてまつりたまふ(殿は西の対に頻繁にお行きになって姫にお目にかかりなさいます)。

[第三段 源氏、玉鬘を訪問し恋情を訴える]

雨の*うち降りたる名残の、いものしめやかなる夕つ方、御前の*若楓(わかかへで)、柏木(かしはぎ)などの、*青やかに茂りあひたるが、*何となく心地よげなる空を見出したまひて、*「うちふる」は<急に降る>。四月の雨は初夏のにわか雨だから、五月雨でも無くまして熱帯過湿の夕立でもないの、
「ざっと」ではなく「さっと」過ぎた通り雨の風情、かと思える。 *「かへで」は秋かと思ったが、秋の季語はカエデが紅葉した「もみぢ」で、「かへでの花」は春の季語、と大辞泉にある。そして「わかかへで」こそが夏の季語、とあり<カエデの若木。また、若葉の萌え出ているカエデ。>との説明がある。また、カエデは葉の形がカエルの手に似ているので「蛙手(かへるで)」とも呼ばれる、ともあり、此処の「わかかへで」は「若返って(殿が色気付く)」の洒落言葉なのだろう。なお、「楓」という字は元々は中国の「フウ」という木の事で、葉の形がカエデに似ていることから、カエデを「楓」と表記する、とのこと。Web サイト「季節の花300」で写真参照させて頂いたところ、カエデとフウではだいぶ違う印象だが、紅葉すると似て来る。 *「かしは」と言えば柏餅を包む葉っぱを思うが、大辞泉には<《カシワの葉に盛ったところから》上代、飲食物を盛るのに用いた木の葉。>との説明もある。特に「かしはぎ」と言えば<《カシワの木に葉守の神が宿るといふ伝承から》皇居警備の任に当たる兵衛(ひょうえ)または衛門(えもん)の異称。>との説明もあり、興味深い。 *「あを」は<若葉の緑>。 *「なにとなく」と言われては掴み所は無いが、初夏の爽やかさ、を思っ置く。

「*和してまた清し(四月の陽気は温和で清々しい)」 *「わしてまたきよし」は、注に<「四月の天気 和して且た清し緑槐陰合うて砂堤平かなり」(白氏文集卷十九、贈駕部呉郎仲七兄)。主語は源氏。>とある。白居易の漢詩という事で、殿の見識の高さ、というか作者の教養の深さかもしれないが、を思わせる演出らしい。私に漢詩は分からないのでWebに救いを求めたが、初夏の気候に気分を良くしているらしい説明はいくつかあるものの、素養のない者に韻の味わいや背景の意味の分かる筈も無く、ふとポール・サイモンの「59番街橋の歌」を思っ見たが、「夕つ方」に朝の歌を夢想してどうなる訳も無く、此処は参照文の当該部分の字面だけを見て済ませます。

とうち誦じたまうて(と殿は気候の良さに浮かれて白楽天の詩を口ずさみなさって)、まづ(何よりも)、この姫君の御さまの(この姫君の御姿の)、*匂ひやかげさを思し出でられて(瑞々しく輝くように感じる華やかさを懐かしく思わずには居られなくて)、例の(例によって女通いをするかのように)、忍びやかに渡りたまへり(目立たぬように西の対に向かいなさいました)。 *「にほひやかげさ」は見慣れない。「にほふ」は<本来の生命力が今を盛りと表に現れるさま>と理解するので<瑞々しい輝き>や<若々しい華やぎ>かと思う。「やか」は「やく(様子めいて)あり(居る)」の定型化した接尾語、に見える。「げ」は「気」で全体の印象。「さ」は<程度の大きさ>。

手習などして(姫は歌の書き写しなどをして)、うちとけたまへりけるを(寛いでいらした姿勢を)、起き上がりたまひて(殿を迎えて正しなさって)、恥ぢらひたまへる顔の色あひ(素顔を見られて恥ぢらっっていらっしやる顔の赤味が)、いとをかし(とても可愛らしい)。なごやかなるけはひの(その温和な感じに)、ふと昔思し出でらるるにも(ふと昔の情景が懐かしく思い出されるにも)、忍びがたくて(夕顔が偲ばれて思わず)、

「見そめたてまつりしは(あなたを初めてお見受け申し上げたときは)、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを(とてもこれほどとは思いませんでしたが)、あやしう(今は不思議なほど)、*ただそれかと思ひまがへらるる折々こそあれ(あなたを母君そのものかと見間違えてしまう時があります)。あはれなるわざなりけり(感無量のめぐり合わせです)。中将の(息子の中将が)、さらに*昔ぎまの匂ひにも見えぬならひに(少しも母親の昔の面影を思わせない姿であることもあって)、さしも似ぬものと思ふに(親子でも然程は似ないものと思っていました)、かかる人もものしたまうけるよ(このように似た親子も世の中にはいらっしやるのですね)」 *「ただそれかと」の言い回しに、事の発端である「夕顔」巻第一章第一段での歌の贈答、を思い起こすのは私だけだろうか。女の贈歌は「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花(和歌 4-1)」で、男の返歌は「寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔(和歌 4-2)」だった。これが誤解と錯覚を引き起こす問題の歌だった。人生は誤解錯覚、である。人は行動する時、必ず思惑を持つ。というか、動物は予見無しに行動できない。その予見が人それぞれに千差万別だ。単に理解不足の人もいれば、高度な計算をする人もいる。頓でもない事も起これば、素晴らしい事も起こる。それが人と関わるといことであり、だから人と関わらない人生はつまらないし、ほとんど意味が無い。だから逆に言えば、人と関わらなければ意味無く生きられる。そう思えば、「あやしう」もいっそう「あやしう」で、「あはれなるわざなりけり」。 *「むかしぎま」は<親の姿>で、殊に母親の姿、とは在りし日の「葵上の姿」。此处で、作者が中将君や葵上を引き合いに出す意図は何か。この作者なら必ず何かしらの含みはある、と思うが、今は良く分からない。取り敢えず葵上から見れば、夕顔は他人だが、この姫は実兄の娘であり姪に当たる血縁である。葵上は没したが、その夫であった光君は婚姻関係図上では、姫の叔父らしい位置に居る。葵上の忘れ形見である中将君を介して、その認識を考える、ということだろうか。今の時点では、机上の空論に見えるが。

とて、涙ぐみたまへり。*箱の蓋なる御果物の中に、橘のあるをまさぐりて、 *「はこのふた」をお盆代わりにする場面は昨秋に中宮が春の上に紅葉を贈った時にもあったが、その時でも「はこ」がどういう物なのかは言及が無く、注釈も無く、何かの道具入れだろうか、と頼り無く見当した。そして此处でも同様に頼り無い。それでも貴人の女だったら、白木ではなく漆塗りの箱だろうかなどと考える。ともかくも「はこのふた」と言う意味は、給仕係が用意した盛り物ではなく、御方が庭先の葉や果実、あるいは菓子類の取り分け分など、を下女か童女にその場で直接指示して取らせ盛らせたもの、かと思う。「くだもの」とあるから「たちばな」は実なのだろう。橘の実はミカンと同じ外見らしいが、酸っぱくて食べられない、とのこと。ミカンは冬の果物、旧暦でもせいぜい春の果実で、四月に残っていたのか少し疑問だが、酸っぱすぎて鳥も食わずに残っていたか。何れ、次の歌を出すための枕になる絵を描く仕掛けのようではある。

「橘の薫りし袖によそふれば、変はれる身とも思ほえぬかな (和歌 24-12)

「この懐かしき香ぐわしき、別の人とは思えない (意識 24-12)

*注に<源氏から玉鬘への贈歌。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集夏、一三九、読人しらず)を踏まえる。>とある。橘の花は今の暦でも五月から六月に咲くようで、「さつきまつ」が「うづき」で満を持す感じだろうか。橘の実の香りから、白い花の開花を待ちわびる気持ちと、昔の恋人が懐かしくて会いたくなった気持ちが重なる、なぜならその人の袖口から焚き染めた橘の香りがいつも漂っていたから。みたいな下敷きか。つまりは「橘の薫りし袖」は<殿の懐かしい恋人>であり、姫の故母君である「夕顔」である。「よそふ」は「寄そふ」で<見比べる>。「変はれる身」は<別人>。率直な思いだから技巧は無い、と取る。

世ととももの心にかけて忘れがたきに(ずっとあなたの母上が恋しくて忘れられずに)、慰むことなく過ぎつる年ごろを(でも故人では会える筈も無く、満たされぬまま過ごしてきた長い年月だったが)、かくて*見たてまつるは(その御ゆかりのあなたにこうして目直にお会いするのは)、夢にやとのみ思ひなすを(夢のようだと思っけていますが)、なほえこそ忍ぶまじけれ(とてもそれだけで私の気持ちは抑え切れそうもない)。*思し疎むなよ(こうして思わず手を取ることを、変にお思いなさいますなよ) *「見奉る」は「慰むことなく(会えなくて残念だ)」に対する言及だろうからくお会いする。「かくて」はくこうして間近に、目直に。 *「疎む(うとむ)」はく相手の性質を難じる気持ち>、「厭ふ(いとふ)」「嫌ふ(きらふ)」はく相手を避けたい自分の気持ち>、かと思う。だから字面だと、この「おぼしうとむな」はくお会いするだけでは私の気持ちは納まらない。そんな私を気味悪く思わないで下さい。>という意味に見える。しかし、下に「み手を捕へ給へれば」とあって、殿は姫の手を握りながらこれらの事を言ったのだからくこうして手を取ることを、変に思うな>という言い方なのだろう。ただ、この「なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」は感情むき出しのくもう我慢できない、いいね。>という、濡れ場の臨場感が迫る場面として楽しむことも出来そうで、少なくとも作者は、姫が殿のそうした意向を察知したことは表現したかったのだろう。

とて、御手をとらへたまへれば(殿は姫の手を握りなさんと)、*女(姫は女心を)、かやうにもならひたまはざりつるを(このように親に向けるものとは考えてもいらっしやらなかったの)、いとうたておぼゆれど(ひどく面食らいなさったが)、おほどかなるさまにてもものしたまふ(ゆつたりした調子でこう返歌なさいます)。 *「をんな」の表記には注目させられる。注にはく『集成』は「女」は、娘分だった玉鬘が、ここで、恋の相手になっていることを示す」と注す。>とある。姫のく女としての側面>という意味だろうが、思わせぶりな表記ではある。字だけ見ると、姫が殿の女になった、肉体関係が在った、かのような印象さえ受ける。が、手を握っただけだ。が、殿が姫の手を握る思いは男としての恋情であった、という明示ではありそう。やはりこの「御手をとらへたまへれば」は、ややこしい関係の始まり、なのかも知れない。

「袖の香をよそふるからに橘の、身さへはかなくなりもこそすれ」(和歌 24-13)

「袖の香が同じ橘は、実のはかなさも似てしまう」(意識 24-13)

*注にく玉鬘の返歌。「橘」「香」「袖」「よそふ」「身」の語句を受けて返す。「五月待つ」の歌を踏まえ、「み」には「身」と「実」を掛ける。「もこそすれ」懸念の気持ちを表す。母君同様に短命になるかもしれません、とうまく切り返す。>とある。確かに風情いっぱい恋情をほのめかした光君の贈歌に冗談で返歌する分には、上手く切り返した歌なのだろう。しかし、手を取って迫る殿の性急さを既述しては、とても冗談では済まなそうもない状況になっているのだから、呑気に返歌が出来る場合とも思えない。「おほどかなるさま」には無理がある、と思えてならない。せつかく二人の関係性が上手く表現できる贈答歌が揃ったのなら、この贈答までは冗談めかして当たりを探る場面、次いで更に手を取って迫る場面、とに分けた構成演出に作者は何故しなかったのだろうか。贈答の後に手を取ったとしたら、「思し疎むなよ」が余りにも露骨で下品な文になってしまうのだろうか。もしや作者がよほどそれに似た実体験を恥じたのか、とさえ勘繰る程だ。いやしかし、それも今更で、人が人の手を取る時に互いに互いの関係性を意識するのは当然だから、其処で「変に思うな」と言われれば、逆に「変な関係性」まで意識せざるを得ない。勿論、無言で見つめられる方が濃密かとは思いますが、この場合はむしろ危険か。要するに、手を取っては言葉も大事だが、直接肌を触れる相手の気持ちは重大な関心事であり、人はそれを五感で感じ取るものだ。

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま(困り顔でうつむく姫の姿は)、いみじうなつかしう(実に愛らしく)、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり(握った手からふっくらと太っていらっしゃる体つきが)、肌つきのこまやかにうつくしげなるに(肌がきめ細やかで触り心地が良さそうに思えて)、*なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまて(殿は思わず欲情を覚えなされたものの)、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける(この日はただ思いを仄めかすだけになさいました)。*「なかなかなる物思ひ」は<意外に手こずる悩み事>みたいな言い方だが、当時の人が是で何を思ったのかが分からなければ、何を言っているのかが分からない言い方だ。とは言うものの、実はこの言い方には現代人でも何と無く感触はある。「このドラ息子」とか「腕白坊や」とか、最近、でも無いかもしれないが、だと「暴れん坊將軍」などと<意外に手こずる悩み事>のことを、今でも言うからだ。詰まりは、不意の勃起である。勿論、生理現象の朝勃ちではなく欲情であり、むしろ勃起しなくても抑え切れない劣情を脳が不意の刺激に覚えた場合には、我ながらの驚きを以って「オッ勃つ」と言う。となると、さらに意外なのがそうなった殿が事に及ぶこと無く、「思ふこと聞こえ知らせ」ただけで<済ませた>ことだ。自制した理由らしき殿の言い訳が下に記されるが、「バレるとマズい」のは言わずもがなの事で、その理由なら手を握るのを自制しろ、と思うのは私だけでは無いだろう。実際の事情は、震えている姫にそれ以上の手出しが出来なかったに過ぎない。マ、それはさて置き、文面は<済ませた>という言い方にはなっていないが、「すこし〜たまふ」は<ちょっと〜する>で<〜するだけで済ませる>という意味だ。となると更に前に戻るが、「心地したまて」の「まて」は「まひて」の音便の「もうて」の表記法かと思うが、問題は、その経過説明の接続助詞の「て」が順接ではなく逆接に読むべきたること、に在ったことが知れるのである。

女は(姫は女として)、心憂く(気が重く)、いかにせむとおぼえて(どうして良いかお分かりにならず)、わななかるけしきもしるけれど(不安に震えている様子もはっきりと分かったが)、「をんなは」は、読者に姫を<女>として強く印象付ける言い方だ。そして何より、姫自身が<女>を強く自覚したことを示す書き方なのだろう。

「何か、かく疎ましとは思いたる(如何してそう嫌がりなさるのか)。いと*よくも*隠して(私はあなたへの善意をなるべく控え目にして)、人に*咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ(目立たないように心掛けていますよ)。*さりげなくてをもて隠したまへ(あなたも私に、さりげない素振りをして心の動揺を隠しなさい)。*「よくも」は<上手く>と訳文にある。ところで、この文の「隠す」とは何を意味するのだろうか。「うまく隠す」という言い方は、表沙汰になると困るものを目立たせないようにする、事かと思うが、文の流れからして素直に読めば、その不都合な事は<殿の姫への恋心>に見える。が、殿は此処で論理のすり替えをしたらしい。然して傍目に不都合でもない娘への世話焼きを、自分の奥床しさから<控えめにしてきた→隠してきた>という言い方で、好意を善意に横滑りさせたようだ。だから、此処の「よくも」は<うまく>という具合よりは<できるだけ、なるべく>という程度、だろう。*「隠す」は<秘密にする>でもあるが、より一般的には<人目を避ける>。*「とがむ」は<非難する、問いただす>だが、より広く<気になる、不審に思う>でもある。「人」は実際には<女房>だろうが、ざっと<傍目>くらいの語感で、「人に咎めらるべくもあらぬ」は<目立たないように>。「心のほど」は<心掛け>。*「さりげなくて」は姫の戦慄きを落ち着かせる言葉なのだろうが、事態の説明は殆ど詭弁であり、それで<何でも無い顔をしろ>は普通に考えれば無理だ。「を」は省略された動詞対象である<動揺>だが、全体の<態度>と取れば「て」「を」は強調の助詞にも見える。

浅くも思ひ*きこえさせぬ心ざしに(浅くは思い申し上げない私のあなたへの心配りに)、また*添ふべければ(さらにこうして私自身が親身な触合いを重ねれば)、世にたぐひあるまじき心地な

むするを(世に例を見ない熱心な面倒見かと思うので)、この訪づれきこゆる人びとには(近頃のあなたに手紙を遣して来た諸侯より)、*思し落とすべくやはある(私をよもや軽視はなさらないでしょうね)。*「聞こえさす」は話者が聞き手に敬意を表した言い方で、「さす」は丁寧語で意味は「聞こゆ(申し上げる)」のまま、らしい。*「添ふ」は、殿が姫の「御手をとらへたま」うたこと、だろう。*「おもひおとす」はく見下す、低く見る。>。「やは」は反語表現でくよもや～すまい>。「よもや」は相手の判断の推量の形だが、反意を許さない脅しにも似た相当強引な念押しだ。事程左様に、この文節全体の言い方は全く以って恩着せがましい限りで、読み間違えているのかと思うほどの強引さだが、念の為に何度も読み直して、やはりこう言い換える。

いとかう深き心ある人は(とてもここまで思い遣りの深い人は)、世にありがたかるべき*わざなれば(私の他には世間には居なさそうな現状ですから)、*うしろめたくのみこそ(あなたの世話を他の人に任せるのは、心配になるばかりです) *「わざ」にはくありさま、事の次第>の意がある、と古語辞典にある。*「うしろめたし」は注に<他人にあなたを託すのは不安だ、の意。「こそ」の下に「はべれ」などの語句が省略されている。>とある。殿の念頭には藤原殿が在るのは間違い無い。

とのたまふ。いと*さかしらなる御親心なりかし(何という能弁な親心なのでしょう)。*「さかしら」はく利口そうに振る舞うこと。物知りぶること。また、そのさま。>と大辞泉にある。「利口そう」かどうかはともかく、殿はまた随分と能弁なく口達者>ではあるようだ。「女は」「戦慄かる気色も著けれど」とあるにも関わらず、姫に情欲を向けた自分の邪心など無かったかのように、殿は控え目だと断りながら、親切な親心を強く押し付ける言い方を、諸侯の恋文まで引き合いに出して、比較優位の理屈も立つかのように平然と言いつつ、という傲慢さだ。最後には、実父の藤原殿でさえ自分ほどの手厚い保護はしないかもしれない、などと手前勝手な言い種である。此处まで来ると、こういう源氏殿の態度の正当性みたいなものに、少し興味が湧く。それは多分こういうことだ。光君は臣籍降下したとはいえ、筆頭朝臣であり、王家の財を管理する実質で最強の<王家>である。王家の欲情は尊い。だから、行き掛かり上の現状では父娘姦淫に見える世間体は具合が悪いが、いざその期に及んでは、実は実の親子ではなかったと開き直れば良いのであり、殿の欲情自体は目出度いことで、疎ましいものである筈が無い、という自信と言うか自負みたいな帝王学なのだろう。ただ、いみじくも最後に言及したように、殿が夕顔をめぐって内大臣に内心深く抱いている確執は、この物語の底辺にずっと一貫して語られて来ている。

[第四段 源氏、自制して帰る]

*雨はやみて(雨はすっかり上がって)、*風の竹に生るほど(風が竹の笹を揺らす音がして)、はなやかにさし出でたる月影(くっきりと照り出した月の光が)、をかしき夜のさまもしめやかなるに(趣きのある夜の風情も物静かなので)、人びとは(姫付きの女房たちは)、こまやかなる御物語にかしこまりおきて(親子水入らずの御語らいに遠慮して)、気近くもさぶらはず(近くには控えていませんでした)。*「雨は止み」とあるが、まだ殿が春の町の自室に居た時に「雨のうち降りたる名残の、いとものしめやかなる夕つ方」とあったのだから、この時点で雨が止んだのでは無く、雲が晴れた、という意味なのだろう。それを「晴れた」と言わないのは、夜だからかも知れないが、下にある「しめやか」を説明しようとしている、のかと思う。*「風の竹に生る」はく風の音が竹から生じる>ということらしく、注に<「風の竹に生る夜 窓の間に臥せり 月の松を照らす時 台の上に行く」(白氏文集卷十九、贈駕部吳郎中七兄)による表現。「なる」は「生る」と「鳴る」の両義を掛ける。集成・完訳・新大系など「竹に鳴る」の表記を充てる。>とある。この下敷きの漢詩は、先に「和してまた清し」と殿に口誦ませた引用詩の続き、らしい。当時の宮廷人読者なら誰でも知っていた

有名な詩なのか、分かる人が分かれば良いと思ったのか、ともかくも作者の洒落心ではあるのだろう。ただ、明るい月夜になったのに「しめやか」だという言い方に、雨上がりだという説明以上に、引用詩にく初夏の風情を静かに楽しむ>という趣きがあって、この情景の説得力を増す書き方のような気はするので、白居易を知らない人も分かる人に聞いて欲しい、くらいに作者は思っていたのかもしれない。

常に*見たてまつりたまふ御仲なれど(いつでも殿は姫に直接お目にかかりなされる御関係だが)、かくよき折しもありがたければ(このように人払いできた良い機会はなかなか無いので)、*言に出でたまへるついで(打ち明けてしまいなされた事に伴う)、御ひたぶる心にや(御高揚感からか)、なつかしいほどなる御衣どものけはひは(着慣れて柔らかくなっている部屋着の衣擦れの音は)、いとよう紛らはしすべしたまひて(上手く立てないように脱ぎ滑らせなさせて)、近やかに臥したまへば(姫に寄り添って半身で寛ぎなされるので)、いと心憂く(姫は本当に気が重く)、人の思はむことも*めづらかに(殿の言動を女房たちが気付きそうな異変ではないかと、気が気で無しに)、いみじうおぼゆ(非常に不安にお思いになりました)。 *「見奉る」は、注にく『集成』は「几帳などを隔てず、直接対面することをいう」と注す。>とある。人を介さず<直に会う>という親子の「御仲」という意味、と解し従う。 *「ことにいづ」は<言葉に出す>だが、「おんひたぶるころ」と下にあるので、殿自身としては<打ち明けた>心算なのだろう。しかし姫の反応の悪さに、殿は恋心を親の親切心だと誤魔化したので、姫としてはますます疑心暗鬼になるばかり、とは思う。 *「めづらか」は<普通と違っているさま>と古語辞典にある。前の「人の思はむこと(女房が気付きそうなこと)」には<異変>の意味で、後の「忌じう思ゆ」には<気懸かり>の意味で、重複して掛かっている、かと思う。

「まことの親の御あたりならましかば(実の親元に居たのなら)、おろかには見放ちたまふとも(親が私を愛情薄く放って置きなされたとしても)、かくざまの憂きことはあらましや(このような厭な思いにさせられることは無いだろう)」と悲しきに(と悲しくて)、つつむとすれどこぼれ出でつつ(隠そうとしても涙がこぼれて)、いと心苦しき御けしきなれば(姫はとても居た堪れないご様子なので)、

「かう思すこそつらけれ(そのように私を疎ましくお考えになることこそ辛いのです)。*もて離れ知らぬ人だに(初めて会った、それまで見知らなかった相手できえ)、世のことわりにて(身分を考えれば)、皆許すわざなめるを(誰でも私の情熱を受け入れるのが当然だろうに)、*かく年経ぬる睦ましさに(このように年を越した親しい間柄で)、かばかり見えたてまつるや(この程度のお近付きを申し上げるのが)、何の疎ましかるべきぞ(何を嫌がることがあるか)。 *「もて離れ知らぬ人」については、注にく『集成』は「全然見知らぬ男にでも、男女の仲の道理として」。『完訳』は「相手がまるで赤の他人の場合であっても、それが世間の道理というもので、女はみな身をまかせるものようですのに」と訳す。>とある。が、「人」は<男=殿>なのだろうか。私には「人=皆」で、殿の相手の女に思える。ただ其処の所は、一先ず<相手>という玉虫表現にして置く。問題はむしろ「世のことわり」が何を意味するかだ。字面では「世のことわり」は<世の習い=世情の道理=常識>かと思うが、そのようにこの文を読むと<男が言い寄れば女は受け入れるのが男女間の道理>みたいなことになる。しかし、世の中はそんなことになっていないし、それは誰にとっても良いのか悪いのか分からない言葉遊びで、概念として成立していない言い方であり、詰まりは無意味な空論である。ということは、この文は一般論ではなく、光君の個人的な事情を自分で説明している、ことになる。ということは「世のことわり」は<常識>に違いないので、此处で言う<常識>が光君にとって何を指しているのか、が問題なわけだ。その答えは<王族血筋の尊さ>であり、此处は光君自身がそれを自負していることを明示する珍しい

場面、なのだと私は思う。だから、「許すわざ」は<女が受け入れること>だが、女は男一般を許すのではなく、王族の光君だから許す、ということだ。*「としへぬる」は、注に<玉鬘は六条院に入って六か月であるが、年を越しあしかけ二年になるので、源氏は「年経ぬる」という誇張表現をしている。>とある。確かに「年経る」は<長い年月>に思えて<六か月を誇張したもの>でもありそうだが、逆に<長い年月>を誇張では無く<殿の夕顔を偲ぶ一方的な思いを押し付けついでに言い放ったもの>とも考えられる。それでも、「末摘花」巻の冒頭に前年の八月の夕顔の死を翌年の一月に「年月経れど、思し忘れず」とあったのが印象的だったので、此处でも<年が明けて一年を越して>と了解して、注に従う。

これよりあながちなる心は(これ以上は強引な気持ちには)、よも見せたてまつらじ(決してお見せいたしません)。*おぼろけに忍ぶるにあまるほどを(ただならず抑え切れない懐かしさを)、*慰むるぞや(晴らしているだけですから) *「おぼろけ」は<普通程度>または<普通でない程度>を意味する語と古語辞典にあり、現代語の「おぼろげ(ぼんやりしている)」とは違うらしい。以前にもノートしたが、全体を客観的に引いて見る冷静さが、この語の姿勢にはあるようで<平常の穏やかさ>または<いつにない不穏さ>あたりの語感かも知れない。*「慰むる」と、こんなにはっきりと殿自身が「自慰」を口にした場面は他に無かったと思う。こういう言い方をされると、私のような者でも、王族血筋の人を自慰で我慢させていては国が危ういのではないか、とふと思わされる。が、それは早とちりらしい。「なぐさむ」は<心を鎮める、なだめる>で、自分のことから<気晴らしをしている>という意味になる。「ぞや」は説明口調。姫を説得し、自分を納得させる、のだろうか。

とて(と言って殿は)、*あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり(実感を込めて親身にお話なさることが多かったのです)。まして、かやうなるけはひは(こうした二人きりの光景は)、ただ昔の心地して(ちょうど夕顔と戯れた昔の気分が思い出されて)、いみじうあはれなり(実に感慨深いのでした)。*「あはれげ」は一見すると<哀れっぽい>みたいな意味に見える。すると、光君が哀れっぽくオナニーをする絵が浮かんで、思わず笑えた。しかし夢想や自慰は楽しみであり、私は決して<哀れっぽいもの>だとは思わない。ただ、哀れっぽい夢想や自慰は有り得る。今の光君の場合がそうだ。思い通りにならない相手との代償行為でしかないそれは、それでも考え次第だとは思いますが、<哀れっぽいもの>かも知れず、むしろそういう見方を好む人が少なからず居そうなのが最も確からしく、反面そうは思わない私のような者が実は多数居る、というのも面白い世情だ。何れにしても、此处の「あはれげ」は<哀れっぽい>ではなく、「あはれ」と実感する「げ(気、様子)」だろう。

わが御心ながらも(殿は思いの外の世慣れぬ姫の態度に、我ながら)、「*ゆくりかに*あはつけきこと(つい先走ってしまった)」と思し知らるれば(と気づきなさって)、いとよく思し返しつつ(性急さをだいで反省なさって)、人もあやしと思ふべければ(これ以上に余り手間取っては、女房たちも変に思いかねないので)、いたう夜も更かさで出でたまひぬ(あまり夜も更けない内にお帰りなさることにしました)。*「ゆくりか」は<にわかなさま、不用意なさま>と古語辞典にある。「ゆく」は「ゆかし」などに似て<心が行く=気が向く>、「り」は<動作・事態の存続・完了を示す助動詞>、「か」は<形態、状態、程度を示す接尾語>、と解す。字面で見ると<気の向くままに>という意味だが、口語文であれば場面に即して、この場合は<つい>である。*「あはつけし」は<軽はずみだ、軽率だ>と古語辞典にある。「あは(淡し)+付く(傾向)+き(状態)」と見る。「あはし」は<味・色などが薄い>と説明され、<考えが浅い=軽薄だ>や<情が薄い=冷淡だ>の意味にもなる、とのこと。「あわつ(慌てる)」とは別の言葉らしいが、「泡(あわ)」のはかなさは「淡(あは)」に通じる気もする。何れにしても、「あはつけきこと」は<欲情して服を脱いだこと>自体ではなく、後始末が面倒な<事が露見する恐れ>への油断、である。つまり、姫は思いの外に世慣れておらず、事を為すのに手間取る

とか散らかるとかで女房を誤魔化せないとの恐れがあって、この場では思い止まざるを得ない、という事情である。ざっと、この場合は<先走り>だ。

「思ひ疎みたまはば(私を嫌いなさっては)、いと心憂くこそあるべけれ(ひどく残念でなりません)。*よその人は(冷淡な人は)、かう*ほれぼれしうはあらぬものぞよ(こう馴れ馴れしくはしないものですよ)。限りなく(今日の事も、限りなく娘に愛情を注ぐ)、そこひ知らぬ心ざしなれば(底知れぬ思い遣りなのだから)、人の*咎むべきさまには*よもあらし(女房たちが不審がる親娘変態などでは決してありません)。ただ昔恋しき慰めに(ただ貴女が余りにも亡くなった貴女の母君に似ているので、昔を偲ぶ慰めに)、はかなきことをも聞こえむ(取り留めの無いことも申しました)。*同じ心に応へなどしたまへ(貴女も私と同じように故母君を偲んで懐かしい気分で語り返して下さい)」 *「よそ」は単に<他>ではなく、古語辞典に<よそよそしい、つめたい>という語感とある。 *「ほれぼれし」は<心を奪われてぼんやりしている>と大辞泉にあるが、此处では近しい態度の弁明かと思うので、<気の緩んだ打解け合い→馴れ馴れしさ>と解す。 *「とがむ」は<非難する>ではなく<不審がる>と解す。「さま」は<変態>。 *「よも」は「よ(おや、と意外に思う)も(ほどにも)」で下の打消しを強調する言い方、かと思う。「よもあらし」は<先ずは有り得ない→決して無い>くらいだろうか、少し前にあった「やはある」とほぼ同じ言い方、かと思う。 *「おなじころ」は<私と同じように昔を懐かしんで>だろうが、姫は在りし日の母君を知らないのだから、殿の一方的な言い方で、最初から姫の立場など考えていないことの表れだ。

と、いとこまかに聞こえたまへど(とても理屈っぽく言い訳なさったが)、我にもあらぬさまして(姫はすっかり判断力を失って)、いといと憂しと思いたれば(ただただ辛いと思っていられさるようなので)、

「いとさばかりには(とてもこれほど私を拒むとは)見たてまつらぬ御心ばへを(思い申しでない御考えを、貴方はお持ちなんですね。)、いとこよなくも憎みたまふべかめるかな(ずいぶんひどくお嫌い為さっているようですから)

と嘆きたまひて(と殿は嘆きなさって)、

「ゆめ、けしきなくてを(決して動揺した姿を人に見せなさいませぬように)」

とて、出でたまひぬ(と言って西の対を去りなさいました)。

*女君も(姫君は女として)、*御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ(御年こそは十分に大人でいらしたが)、世の中を知りたまはぬなかにも(世間知らずの晩生と言っても)、すこしうち世馴れたる人のありさまをだに(ほんの少し世慣れたばかりの男女の付き合い方でさえ)見知りたまはねば(ご存じないので)、*これより気近きさまにも思し寄らず(男というものがこんな風にして女に近付いて来るものとは思ひも寄りなさらず)、 *「をんなぎみ」とは夫人のような言い方に聞こえるが、姫の女としての事情という言い方らしい。 *「おんとし」は注に<玉鬢二十二歳。>とある。 *「これより」の「より」は<これ以上に>という意味の比較基準の格助詞ではなく、<このような遣り方で>という意味の事情説明の格助詞で、殿が「近やかに臥したま」うたことを指す、と解す。注には、この文を<『完訳』は「初心の処女らしい反応」と注す。>とある。

「思ひの外にもありける*世かな(考えられない現実だ)」と、*嘆かしきに(悲観気味に呆然として)、いとけしきも悪しければ(顔色まで悪くなっていたので)、人びと(女房たちは)、御心地悩ましげに見えたまふと(姫が御病気でお体の具合が悪そうだと)、もて悩みきこゆ(心配いたします)。*「世」は身の上、の意。と注にある。「身の上」は事情だろうし、人生は事情だとは思いますが、此処の「世」はその意外さに驚きをもって出くわした<現実>かと思う。*「なげかし」は「嘆く」の形容詞化とあり、ざっと<嘆かわしい>と説明され、「嘆くさまにて」のような客観表現でも無い。そして、「嘆かわしい」は「嘆く(悲嘆する)」とは違い、実際に嘆いたのなら「嘆きて」と言う筈で、「嘆かしきに」と言うのは「思ひの外」の事態に困惑したままの状態である、その形態形容だ。だから困惑したままなので、未だ事態を悲しいと結論するだけの分析は出来ていないが、意外性に恐れがあって悲観気味になっているのであり、悲観しているのでは無い。

「殿の御けしきの(殿のご配慮の)、こまやかに(何と行き届いて)、かたじけなくもおはしますかな(ご親切でいらっしゃいますこと)。まことの御親と聞こゆとも(実の親と申し上げても)、さらにかばかり思し寄らぬことなくは(とてもこのようにはお気付き為さることも無く)、もてなしきこえたまはじ(お世話下さらないでしょう)」

など、*兵部なども、忍びて聞こゆるにつけて(そっと耳打ちするにつけても)、いとど思はずに(姫はますます反感して)、心づきなき御心のありさまを(父親代わりの世話人という、信頼を裏切った殿の為さりようを)、疎ましく思ひ果てたまふにも(悲しく諦めなされるにも)、身ぞ心憂かりける(自分の身の上が情けなかったのです)。*「ひょうぶ」は姫付きの女房で乳母子でもある。姫にとっては姉代わりといったところなのだろう。だから平気で姫にも意見する間柄、なのかも知れないが、であれば姫の晩生振りは少なからずこの女房に責任がある。それだけに、兵部の君が呑気に殿を褒めることに、姫は如何言っても良いか分からないながらも、漠として然し強い憤りを感じる、のだろう。この場面に兵部を登場させる意味は、側近女房が藤原氏を意識する余りに、如何にこの姫を世間知らずに育ててしまったかという非難を、作者は同業者として兵部に向けている、ように思う。なお、この女房は「玉鬘」巻第二章第四段に「あてきと言ひしは、今は兵部の君といふぞ」と紹介されていて、読者としては、五条の家に居た童女がこの人だとすれば、何だか小さい時から知っている子のような気がして、妙な親近感がわく。本当に妙だ。

[第五段 苦悩する玉鬘]

*またの朝(翌朝)、御文とくあり(殿から姫にお手紙が早々にありました)。*注に<後朝の文の体である。>とある。そして、それが男女間の作法による手紙だという意味を知るのは殿と姫だけであり、周りの女房たちは、親代わりの殿から体調不良の娘を案じて何か言ってきたのだろう、くらいに思っている、という設定。

悩ましがりて臥したまへれど(姫は気分が優れぬ風に臥していらしかが)、人びと御硯など参りて(女房らが硯などを用意して)、「御返りとく(御返事を早く)」と聞こゆれば(と申し上げるので)、しづしづに見たまふ(姫はしづしづ手紙を御覧になります)。*白き紙の(白い文書用紙に)、うはべはおいらかに(うわべは平然と)、すくすくしきに(事務的に)、いとめでたう書いたまへり(とても美しい字でお書きになっていました)。*「白き紙」は注に<白の料紙。表面的には親子の間の手紙といった体裁。恋文には色彩鮮やかな薄様の料紙を用いる。>とある。「料紙(れうし)」は<物を書くのに用いる紙。用紙。>と大辞泉にある。

「たぐひなかりし御けしきこそ(普通では無い御様子だったので)、つらきしも忘れがたう(気の毒だったし気になります)。いかに人見たてまつりけむ(お付きの者は如何見立てていますか)。

うちとけて寝も見ぬものを若草の、ことあり顔にむすぼほるらむ (和歌 24-14)

まだ世慣れない若草の、物怖じなんじゃないですか (意識 24-14)

*注に<源氏から玉鬘への贈歌。「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」(伊勢物語四十九段)を踏まえる。玉鬘を「若草」に喩える。「寝」と「根」は掛詞。「根」は「若草」の縁語。>とある。この参照歌は有名らしく、辞書の「若草」の説明で例示に多く引用されている。また、「伊勢物語四十九段」も良く知られているようで、いくつかのWebサイトの解説に依れば、この歌は隣にいる妹を可愛いと感じた兄が妹にふざけて言った、という話らしい。「うら若み」の、「うら」は<裏→内心→内側から本来の性質が顕われる>で、接頭語として「若し(若々しい)」を強調し、「み」は状態・程度を示す接尾語で形容詞の語幹に付いて名詞化させる。「若草」は新芽の草原や刈り取ったばかりでまだ干していないワラ草の束なら、その上に寝転がると気持ちいいから「寝よげに見ゆる若草」とあっさり言えるのだろう。でも「わかくさ」は「若い(未熟な)」「種(性質のもの)」で<処女>を意味するから、「寝よげに見ゆる」は<抱き心地が良さそうな>となる。「うら若み」に「若草」を重ねては、他の意味に取りようも無い。「人の結ばむこと」は<他の男と結婚すること>で、「しぞ思ふ」はそのことにこだわって<残念に思う>という言い方ようだ。「結ぶ」が<言い交わす>で、「結ぼほる」も<縁を結ぶ>だが、その他に<固まる→意固地になる→こだわって気が滅入る>という意味があるところが、殿の工夫なのだろう。

幼くこそものしたまひけれ(子供じみてますよ)」

と(とと思い過ぎしを宥めるような)、さすがに親がりたる御言葉も(いかにも親ぶった殿の御言葉も)、いと憎しと見たまひて(昨日の殿の言動を思えば何と白々しいと、実に不愉快に文面を御覧になって)、御返り事聞こえざらむも(姫がご返事を差し上げないのを)、人目あやしければ(女房たちが不審がるので)、ふくよかなる*陸奥紙に、ただ、 *「陸奥紙(みちのくにがみ)」は注に<玉鬘の返書の料紙、陸奥紙を使用する。恋文以外の普通の場合に用いる紙。>とある。

「*うけたまはりぬ(御用向きは承りました)。乱り心地の悪しうはべれば(気分が優れませんので)、聞こえさせぬ(今はお返事できません)」 *いかにも事務的な応答の調子。

とのみあるに(とだけあったので)、「かやうのけしきは(こういう文面を見せるところは)、さすがにすぐよかなり(意外に気丈ではないか)」とほほ笑みて(と殿は微笑んで)、*恨みどころある心地したまふ(弱いばかりでは無さそうな姫の気性に、かえって安心して言い寄れる手応えを感じていらっやいます。)、うたてある心かな(困った性分ですかね)。 *「恨み処」は<恨み甲斐のある性分→恋の相手になる気質>という意味らしいが、「裏見所(反面の見るべき性質)」とも読めそうで、その複意で言い換える。

*色に出でたまひてのちは(殿は姫にはっきりと欲情を知らしめなさってからは)、「太田の松の」と思はせたることなく(古歌の「太田の松の」のような、逢うだの待つのと悠長な思わせぶりの恋遊びではなく)、*むつかしう聞こえたまふこと多かれは(男根の難かりを訴えなさることが多くなったので)、いとど所狭き心地して(姫はますます追い込まれて)、おきどころなきもの思

ひつきて(身の置き所も無く塞ぎ込んで)、いと悩ましうさへしたまふ(本当に体調を壊してさえしてしまいそうです)。*「いろにいづ」は<感情が顔色に出る>が語源だろうか、今でも同様の<気持ちが表われる>という意味で使う。が、此処は顔色の話では無い。殿は姫に、高貴な欲情を知らしめた、のである。即ち、「色に出づ」は<はっきりと言う>だ。が、殿は姫にはっきりと告白しただろうか。殿が姫に最も迫った具体的な記事は第三段の、手を取って「なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」と言った所かと思うが、より際どい記事は第四段の「言に出でたまへるついで、御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば」であり、その場面では会話は記されていないが、殿が姫に「ああ可愛い。抱きたい」と劣情を口洩らしても不思議は無い。「色に出づ」を<それらしく>ではなく<はっきりと>だとすれば、そう思う他ないかも知れない。ところで、此処の言い回しは<「恋ひわびぬ太田の松のおほかたは色に出でてや逢はむといはまし」(躬恒集、三五八)。>と注釈に参照歌が示されていて、洒落た言い方をしているらしい。が、この参照歌は良く分からない。恐らくは、「おほかた」は地名で「こひわびぬ」に関連付けられる土地柄なのだろう。そして、「おほかたのまつ」が「おほかたは」を言い出す枕になっている、という仕掛けなのだろう。が、「太田」が何処で、躬恒が「太田」や「太田の松」を詠む意味合いが何なのか、全く分からず、丸で味がしない。まあ、「太田」というからは<平野の広い稲田>で、「松」も其処に良い姿で生えている<名所>なんだろう。ただ、「恋ひわびぬ」を<恋に思い悩んでしまったが>と読めば、「おほかたのまつ」は近似音読で「あふたの(逢うとか)まつの(待つ、逢えないとか)」の洒落言葉に見えてきて、であれば「おほかたは」は<考えてみれば、どうやら>だが<逢ふ方=逢う方法は>でもあるから、「太田の松のおほかたは」は<逢うか待つかで逢うとするなら>と読める。「色に出でてや」は<はっきり分かるようにして>。「逢はむ」は<逢おう=逢いたい>。「いはまし」の「まし」は<～だったら良かったのになあ>だから、実際は言わなかった事情を汲んで<言えば良かった>と解す。即ち、この歌の複意は<こんなに恋しくなるのなら逢った時にはっきりとまた会いたいと言えば良かった>という歌謡曲だ。ただし、表意は分からない。ところで、引用句の「太田の松の」はこの参照歌全体の意味ではなく、洒落言葉としての<逢ふたの待つ>という中途半端な状態こそを言っている、と考えた方が分かり易い。*「むつかし」は<不快である、厭だ、うっとうしい、煩わしい、面倒だ、気味が悪い、恐ろしい>と古語辞典にある。この凄まじい語感、もはや「思はせたること」ではなく実弾の始末とは即ち射精をしたがった、ということだろう。つまり、「聞こえたまふこと」は<口説き>などではなく、口淫や手淫の<強要>だ。

かくて(こうして)、ことの心知る人は*少なうて(ことの真相を知る人は少なくて)、疎きも親しきも(世間は勿論のこと邸内の女房たちでも)、むげの親さまに思ひきこえたるを(殿を単に面倒見の良い親のように思い申しているのを)、*「すくなうて」は聞き捨てなら無い。尤も、姫が誰にも相談しなかった、と言う事の方が有り得ないとも思えるから、一人二人には打ち明けたのだろうが、問題はそれが誰かだ。先ず思いつくのが兵部の君で、もう一人はやはり右近あたりか。兵部が万一に備えて、慌てて姫に床あしらいの手ほどきをしたかと思うと、何だか微笑ましい。

「*かうやうのけしきの漏り出でば(こうした事情が外に露見すれば)、いみじう人笑はれに(ひどく世間の物笑いとなり)、憂き名にもあるべきかな(汚名を着せられることだろう)。父大臣などの尋ね知たまふにても(仮に秘密が漏れて、父君が私を実の娘とお知りになるにしても)、まめまめしき御心ばへにもあらざらむものから(手塩に掛けた思いの深い親心ではいらっしやらないだろうから)、ましていと*あはつけう(ますますもって関心が薄く)、待ち聞き思さむこと(進んで手を差し伸べては下さないだろう)」*「かうやうのけしき」の主たるものは殿の態度だろうが、「けしき」に「御」が付く「みけしき」と書いていないので、全体の<こうした事情>と読む。それにしても、この章の記事

はかなり際どく、姫を「女君」と表記したりして、此処の「かうやうのけしき」という曖昧な言い方にも、もしや肉体関係に及んだかとさえ勘繰るほどだが、さすがにそうした一大事の記事は無く、今のところは危うい状態が続いている、ということのようだ。 *「淡つこう」は<薄まる>。

と(と姫は)、よろづにやすげなう思し乱る(何事も心休まること無く思いを乱しなさいませう)。

宮(兵部卿宮)、大将などは(右大将などは)、殿の御けしき(殿の御意向では)、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて(姫の相手として各々が自身を論外でも無いようだと伝え聞き為さって)、いとねむごろに聞こえたまふ(とても熱心に手紙を遣しなさいませう)。

この岩漏る中将も(あの恋心を岩漏る水と詠んだ藤中将も)、*大臣の御許しを見てこそか(殿が中将の和歌を褒めて人物に期待なさっていたことを知った文遣いの下臈のミルコが、殿のお許しを得たと思ったからか)、たよりにほの聞きて(人伝に脈があるらしいと聞き付けて)、まことの筋をば知らず(実は姉弟の間柄だということを知らずに)、ただひとへにうれしくて(ただ嬉しい気持ちだけで)、*おりたち恨みきこえまどひありくめり(折り入って適わぬ恋を訴えてうろうろと辺りを馬から下り立って歩き回るようです)。 *「おとどのおんゆるし」の文は、注に<『集成』は「源氏がお認めになっているということ。次の「みてこそかたよりに」は解しがたい。宣長は「みるこがたより」の誤写とする」と注す。「みるこ」は女童の名前である。河内本「みてこそかたよりに」の句ナシ。>とある。良く分からない注釈だが、どうやら定説が無い部分らしい。であれば、気楽に冒険が出来そうだ。で、第二章第四段の殿が右近に中将の歌に付いて感想を述べた場面を参照して言い換えてみた。 *「おりたつ」は<馬を下りて立つ>という意味と<折り入って行く>という意味があり、此処では<折り入って>が文章上の意味で、<馬を下りて>は「まどひありく」に掛かる洒落言葉なのだろう。そして、そういう冗談めかした言い回しの語り口がこの帖の味わいかと思う。

(2011年1月31日、読了)